SCW放射光利用計画ミニワークショップ 06 2/9、深見

SPring-8超伝導ウイグラー(SCW)の磁場測定

- 1.SCWの概要
- 2.磁場の測定方法
- 3. 結果(途中経過)
- 4.多極磁場の解析
- 5.まとめ
- 6.今後の計画

1.SCWの概要 1-1.磁極形状と磁場分布





・Central-pole
 中心1ヶ所
 By_{MAX}=10Tで放射光発生
 ・Side-pole
 左右2ヶ所
 By=~2Tでビーム軌道を
 元に戻す

外部に影響を与えないSCW Byds=0 (dⁿBy/dxⁿ)ds見積もる

Fig.1-1. 磁極形状(上)と磁場分布(下)

1-2.SCW**外**形図

・開口部の寸法が小さい(20mmx70mm)うえ奥行きが長い(~2m)
 ・磁場が強い(10T)ので金属性材料が使用できない

両端でテンションをかけたゴム製ペルトにホール素子を乗せて移動





Fig.1-2.SCWの断面図(左)と開口部拡大図(右)

2.磁場の測定方法
2.1.測定範囲と精度
(1)方法:ホール素子 + 移動用ベルト
(2)範囲:By、Bx、Bs、0~10T(Max.9T)
(3)項目:励磁特性(x=y=s=0)、s方向分布(x=y=0,-720mm<s<+720mm) 断面分布(9T)
-20mm<x<+22mm、-0.5mm<y<+2mm(y=0)、-720mm<s<+720mm
最大振幅 x_{MAX}=-7mm ± 10mm(at s=0)、ビームサイズ σ_x=0.1mm

 $\delta By (By - By_0) / By_0 < 10^{-5}$



Fig.2-1. SCWチェンパ開口と測定範囲

2 - 2.ホール素子移動用ステージ s方向:ステッピングモータ x, y, θs方向:マイクロメータ付きステージ



Fig.2-2.SCWとホール素子移動用ステージ

2-3. 測定誤差の主要因

(1)ホール素子設置位置誤差:δx、δy < 0.5mm

$$\delta y = a \{ \cosh(\frac{s}{a}) - \cosh(\frac{s_0}{a}) \} \qquad (2-1)$$

(2)ホール素子設置回転誤差: $\delta\theta x$ 、 $\delta\theta s$ $B_y = B_{y0} \cos \delta \theta_{x,s}$ (2-2)

$$\delta\theta_x = \frac{d\delta y}{ds} = -\sinh(\frac{s}{a})$$
 (2-3)

(3)ホール素子周辺温度の分布: δT $\delta B_{y} = c \delta T, \qquad c = 4 \times 10^{-4} \qquad (2-4)$ a=H/w=2.23x10³m、s₀=1.116m δy < 0.28mm

ビーム軌道上の磁場を内挿

絶対値の誤差:δθs、δθx < 50mrad δBy < 0.13%

s方向の相対誤差:δθx < 0.5mrad δBy < 1.25x10⁻⁷

相対誤差

 x: $\delta I < 0.3 deg$ $\delta By < 1.2 x 10^{-4}$

 s: $\delta T < 3.0 deg$ $\delta By < 1.2 x 10^{-3}$

2-4.設置回転誤差の補正

δθs:θステージでベルトを傾ける。δθx:基準電磁石を傾ける。



Fig.2-3. プローブの回転角度に対する中心磁場の測定値

δθs=44.3mrad, δθx=46.5mrad δBy=0.10%, 0.11%

3.結果(途中経過) 3-1.励磁特性と再現性



Fig.3-1. 中心(x=y=s=0)での励磁特性(左)と磁場再現性(右)

絶対値精度:< 0.12%(By > 3Tesla) 磁場再現性:< 0.01%

3-2. 長手方向分布(s方向分布)



Fig.3-2. 中心軸上(x=y=0)のs方向分布(左)と積分磁場(右)

Byds:< 0.01Tm SCWでのキック:< 0.37mrad

3-3. 断面分布(x方向分布)



Fig.3-3. 長手中心面 (y=s=0) でのx方向分布。 左: 1-5 Tesla、右: 6-9 Tesla

6次関数でフィッティングして多極成分を求めた

4. 多極磁場の解析 4-1. 多極成分(9Tesla、4極、6極成分)



Fig.4-1.4極成分と六極成分のs方向分布。 中心軸上(x=y=0、白)とビーム軌道上(赤)

(dBy/dx)ds [T]= -0.1578 ± 0.0004, -0.8529 ± 0.0005 $(d^{2}By/dx^{2})ds$ [T/m]= 55.1 ± 0.2, 58.7 ± 0.2

4-2. 多極成分のまとめ

表4-1. 多極成分のビームに沿った積分値(9Tesla)

極数	積分値	
4	-0.8529 ± 0.0004	[T]
4*	-0.4738 ± 0.0005	[T]
6	58.7 ± 0.2	[T/m]
8	$(-5.2 \pm 0.8) \times 10^2$	[T/m ²]
10	$(-3.6 \pm 0.5) \times 10^5$	[T/m ³]
12	$(-4.0 \pm 1.0) \times 10^{7}$	[T/m ⁴]
14	$(1.0 \pm 0.7) \times 10^{10}$	[T/m ⁵]

*
$$x'' + (\frac{1}{\rho^2} + k)x = 0$$

の左辺第二項を表示

4極: $\Delta v, \Delta \beta$ 寿命低下 $\Delta v_{x,y} = -0.0035, 0.033$ $|\Delta \beta_{x,y} / \beta_{x,y}| < 2.7\%, 26\%$ Cf. $\Delta v_{x,y} \sim 0.5/1$ 台 6極:入射効率低下 Cf. 50~100[T/m]/1台

6極以上はトラッキングにより 外部への影響を計算

4 - 3 トラッキングの結果 計算コード"CETRA" (SPring-8オリジナル)を使用



Fig.4-2.SCW導入による入射からの 電子生存率の変化(1000粒子) Fig.4-3.SCW導入によるダイナミック アパーチャの変化

・入射効率から見れば、少なくとも6極電磁石が新規に必要
 ・今後、9T以外でも確認する

5.まとめ

・磁場主成分でのキック量は補正可能(0~9T)

- ・4極成分によるチューンシフト、ベータ関数歪みは 既設の四極電磁石で補正可能(9T)
- ・6極成分により入射効率が低下する可能性あり(9T)

6.今後の計画

・9T以外で磁場測定し多極成分の影響を見積る